氏　　名	ダニエーレ レスタ
学　　位	博士（日本言語文化学）
学位記番号	甲第１１７号
学位授与年月日	平成２６年９月１３日
審査研究科	外国語学研究科
論文題目	酒呑童子のメタモルフォーゼ―説話の翻訳・演劇・映画を中心に―
論文審査委員	（主査）大東文化大学教授　藏中　しのぶ
	（副査）大東文化大学教授　寺村　政男
	（副査）大東文化大学特任准教授　青木　淳子
	（副査）いわき明星大学元教授　田嶋　一夫

博士論文　審査報告

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

１．論文の要旨およびその特色

本論文は、南北朝期から現代にいたるまで、さまざまなジャンルで展開した「大江山酒呑童子説話」の変容の過程をたどり、比較文学の《出典論》の立場から、特に江戸時代以降現代にいたる変容の様相

とその要因、これを支えた人的ネットワークと新たな文学的創出について考察を加えたものである。

研究対象は、『御伽草子』をはじめとする日本古典文学、これを原拠とする明治期の英訳ちりめん本および現代の日本映画・演劇・少女まんがにみられる「大江山酒呑童子説話」である。

本論文は、大きく次の二つの内容から成る。

第一に、ちりめん本の問題（第一章）である。

「ちりめん本」は、明治期、長谷川武二郎の弘文社が版行した袋綴装の彩色絵入り欧文訳の刊本で、織物の縮緬のような風合いをもつちぢれた和紙を使用したため、この名がある。日本の説話文学・民間伝承等を、欧米諸言語に翻訳した日本紹介の要素を持つ作品群で、当時は海外への土産物としての需要があり、国内のみならず、海外の図書館にも多数所蔵されている。「ちりめん本」の翻訳言語には、英語の他、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ポルトガル語、オランダ語、デンマーク語、スエーデン語、イタリア語、ロシア語が確認されており、これらの多くは英訳に基づく重訳とされてきた。

本論文が研究の対象とするのは、「ちりめん本」を代表する英語版『JAPANESE FAIRY TALE SERIES（日本昔噺シリーズ）』全二十冊の第十九號として、明治二四年（一八九一）に刊行されたジェイムズ夫人訳『The OGRES of OYEYAMA（大江山）』である。「ちりめん本」における「酒呑童子説話」を軸として、明治期に、外国人が酒呑童子説話をどのように解釈したかという翻訳論の問題と、これを支えたちりめん本翻訳者・外国人日本研究者の動向と人的ネットワークの解明に取り組んだ。

第二に、歌舞伎・日本映画・少女まんがにおける「酒呑童子説話」の享受と、現代的な変容・文学的達成の問題である（第二章・第三章）。歌舞伎・日本映画・まんがという異なるメディア間で「酒呑童子説話」のモチーフが交錯し、新たな表現や解釈・人物造型を生みだしてゆく様相を、日本文学・比較文学の《出典論》の研究方法をメディアに援用し、一字一句まで比較検討し、緻密な分析を行った。

２．論文の審査内容および評価

本論文は次の五章から成る。

序章

第一節　問題の所在と本研究の方法

第二節　本研究の構成

第三節　酒呑童子の研究史

第一章　ちりめん本『The OGRES of OYEYAMA』の翻訳

第一節　ジェイムス夫人とちりめん本『The OGRES of OYEYAMA』

第二節　御伽草子とちりめん本『The OGRES of OYEYAMA』

第三節　グリフィスと『Raiko and the Shi-Ten Doji』

第四節　ちりめん本『The OGRES of OYEYAMA』とグリフィス『Raiko and the Shi-Ten Doji』

第二章　八尋不二に『大江山酒天童子』論－酒呑童子の歌舞伎と映画－
第一節　「戻橋」のメタモルフォーゼ―歌舞伎『戻橋』と五都宮章人『羅生門の妖鬼』の影響－
第二節　「茨木」のメタモルフォーゼ―歌舞伎『茨木』と五都宮章人『羅生門の妖鬼』の影響－
第三節　八尋不二と五都宮章人
第三章　酒呑童子のクロス・メディアー川口松太郎・田中徳三・木原敏江－
第一節　川口松太郎と『大江山酒天童子記』
第二節　田中徳三と『大江山酒天童子』
第三節　木原敏江と『大江山花伝』
第四節　『大江山花伝』の画像表現―渡辺綱と茨木の出会い
第五節　「藤の葉」の誕生―木原敏江『大江山花伝』における女主人公の造型
終　章

「序章」では、日本文学・美術史・歴史学・民俗学の諸分野における酒呑童子の研究史をたどり、問題の所在と本論文全体の構成を述べた。Edward Putzar、Barbara Ruch、James Araiをはじめ、今日の日本とヨーロッパ・アメリカの酒呑童子研究の到達点と動向、方法論について論じ、本研究の方法として、文献学・書誌学、比較文学の出典論・源泉論・主題論を用いることを述べた。日本における研究のみならず、ヨーロッパ・アメリカの研究動向を視野に入れ、国際的な日本学として日本とヨーロッパ・アメリカの研究をつなぐ日本文学研究・日本言語文化学研究の立場を鮮明に打ち出した。

「第一章　ちりめん本『The OGRES of OYEYAMA』の翻訳」では、ちりめん本『JAPANESE FAIRY TALE SERIES（日本昔噺シリーズ）』の第十九號として刊行された「大江山酒呑童子説話」、ジェイムス夫人訳『The OGRES of OYEYAMA（邦題『大江山』）』について、初めて詳細な本文研究を行った。

「第一節　ジェイムス夫人とちりめん本『The OGRES of OYEYAMA』」では、「ちりめん本」をめぐる明治期の知日派外国人ネットワークを示すとともに、『JAPANESE FAIRY TALE SERIES（日本昔噺シリーズ）』の刊行状況を調査した。「ちりめん本」の各国語訳の流れが的確に整理されており、手堅い書誌学的研究として評価される。

特筆に値するのは、唯一のジェイムス夫人の伝記史料として、シャーフによって部分的間接的に紹介されるのみであった一八九四年のラフカディオ・ハーン（小泉八雲）がチェンバレンに宛てた書簡を、初めて全文紹介とともに日本語訳し、ジェイムス夫人が「ちりめん本」に関わることになった経緯をあきらかにした点である。これによって、ジェイムス夫人が、イギリス帰国後も「ちりめん本」の英訳に携わった事績を解明した。チェンバレン、ラフカディオ・ハーン、ジェイムス夫人など、「ちりめん本」翻訳に介在した人物の交友関係は、「ちりめん本」を支える人脈としてのみならず、明治期の知日派外国人のネットワークの一端を示すものであり、今後の研究が期待される。また、ジェイムス夫人が翻

訳を手がけた「ちりめん本」英訳の全体像を示し得たことは大きな成果である。

「第二節　御伽草子とちりめん本『The OGRES of OYEYAMA』」では、両者の本文を詳細に比較検討し、ジェイムス夫人が『御伽草子』に直接依拠して翻訳した部分について考証を加えた。『御伽草子』にみられる「三人の翁」「神酒」等、ジェイムス夫人の翻訳には、日本や日本文化を知らない外国人への配慮が随所に見られ、ヨーロッパの文化に擬えて翻訳するくふうが凝らされている。これによって、ジェイムズ夫人の翻訳の意図をあきらかにしたが、この問題は、なお、深めてゆくことが期待される。

「第三節　グリフィスと『Raiko and the Shi-Ten Doji』」「第四節　ちりめん本『The OGRES of OYEYAMA』とグリフィス『Raiko and the Shi-Ten Doji』」では、ジェイムス夫人訳に先行し、影響を与えた「酒呑童子説話」の英訳本として、明治十三年（一八八〇）ウイリアム・エリオット・グリフィス訳を指摘した。この発見の意義は大きい。さらに、グリフィス訳とジェイムズ夫人訳の本文を詳細に比較することによって、両者の翻訳の姿勢・意図、翻訳の手法、全体の構想のちがいをあきらかにした。

グリフィスは『皇国』の著者、日本学研究者として著名であり、ジェイムス夫人の夫と同様、幕末・維新期のお雇い外国人であった。近代日本において、お雇い外国人が日本文化の紹介・研究に果たした役割と「ちりめん本」との関係を指摘した点には、今後の追究が大いに期待される。また、近年、グリフィスは、出身大学ラトガース大学所蔵グリフィス・コレクションによって、黎明期における写真の関係者としても注目されており、この新たな知見は、活性化しつつあるグリフィス研究にとっても大きな意義をもつ。

「ちりめん本」は、明治初期、日本が鎖国体制から脱却し、近代国家として歩み出そうとする時期に、外国人向けに刊行された。折しも、中野幸一・榎本千賀編『ちりめん本影印集成　日本昔噺輯篇』（勉誠出版、2014年3月）が刊行され、「ちりめん本」研究が緒に就いたこの時期に、いち早く、本文の内容と翻訳論に深く踏み込み、客観的な分析によって大きな成果をあげた。グリフィス訳とジェイムズ夫人訳を詳細に比較して、両者のもつ日本文化に対する意識の差を論じた点は、誠に興味深い。今後の課題として、両者の相違点を示しながら、その意味の追究をさらに深められたい。「ちりめん本」の背後には、当時の外国人が日本文化にどのように対処したか、日本文化をどう解釈したかという問題が横たわっており、日本学にとってきわめて重要な研究課題として、今後の研鑽が期待される。

「第二章　八尋不二『大江山酒天童子』論ー酒呑童子の歌舞伎とシナリオー」は、昭和三五年（一九六〇）田中徳三監督『大江山酒天童子』を軸として、原拠となる歌舞伎『戻橋』『茨木』、映画の原作として執筆された川口松太郎の短編小説『大江山酒天童子記』、さらに、映画のシナリオとして五都宮章人『羅生門の妖鬼』と八尋不二『大江山酒天童子』を対象として、国文学・比較文学の《出典論》の方法によって考証したクロス・メディアの出典研究である。

古典文学の伝統を引き継ぐ明治期の英訳ちりめん本に続いて、明治期の歌舞伎の伝統、昭和期の小説・映画・まんがというメディアがクロスする状況のなかで、酒呑童子説話が遂げた変容（メタモルフォ

ーゼ）の様相を解明した。

「第一節「戻橋」のメタモルフォーゼ―歌舞伎『戻橋』と五都宮章人『羅生門の妖鬼』の影響ー」「第二節「茨木」のメタモルフォーゼ―歌舞伎『茨木』と五都宮章人『羅生門の妖鬼』の影響ー」では、昭和三五年（一九六〇）川口松太郎原作・田中徳三監督・八尋不二脚本の大映映画『大江山酒天童子』、昭和三一年（一九五六）佐伯清監督・五都宮章人脚本の東映映画『羅城門の妖鬼』が、いずれも『平家物語』「剣巻」を原拠とする河竹黙阿弥作の歌舞伎舞踊『戻橋』『茨木』『土蜘蛛』を踏まえていることを論証した。さらに、田中徳三の映画は川口の原作小説を改作し、むしろ、歌舞伎に回帰していることをあきらかにした。その背後状況として、当時の日本映画界における「歌舞伎」から「時代劇映画」への転換があり、また、当時の映画界における脱歌舞伎派と歌舞伎回帰派の複雑な対立構造の反映を読み取った。

「第三節　八尋不二と五都宮章人」では、両者のシナリオを詳細に比較し、八尋不二のシナリオが五都宮章人の『羅生門の妖鬼』と酷似していることを指摘した。さらに、八尋不二自身が、合作ペンネーム五都宮章人のひとりであったことをあきらかにした。

近現代の映画製作の発達過程において、歌舞伎と映画との関係性が日本文学の分野でも論じられているが、本論文は、文献学の手法を徹底させ、その関係性を読み解いた。シナリオと関連文献を対照するのみならず、時代をさかのぼり、基となった文献の出典を明確にすることで、キーワードの持つメタファー（隠喩）をも示唆したものとして高く評価される。さらに、「五都宮章人」が合作ペンネームであることを指摘した点は、今後の映画研究にとっても価値ある知見である。

「第三章　酒呑童子のクロス・メディア―小説・映画・まんがを中心に」では、現代日本の小説・映画・少女まんがにおける「酒呑童子説話」のメタモルフォーゼの具体相をたどり、出典論の立場から考察を加えた。川口の小説『大江山酒天童子記』の着想が、田中徳三の映画『大江山酒天童子』で川口・田中の協力体制のもとで映像化され、さらに、木原敏江の少女まんが『大江山花伝』において主体性をもつ女主人公の造型へと展開する様相を論じたものである。

「第一節　川口松太郎と『大江山酒天童子記』」「第二節　田中徳三と『大江山酒天童子』」では、川口松太郎の原作と田中徳三の映画を比較し、その結果、川口の原作が大きく改変され、映画に生かされていないことを論じた。

「第三節　木原敏江と『大江山花伝』」「第四節　『大江山花伝』の画像表現―渡辺綱と茨木の出会い」では、田中徳三の映画の映像表現と、木原敏江のまんがの画像表現を比較した。その結果、木原敏江のまんがが、田中徳三の映画から大きな影響を受けていることを論証した。これによって、田中徳三から木原敏江へと展開した昭和の「酒呑童子説話」のビジュアリティの独自性と創造性を論じた。

「第五節　「藤の葉」の誕生―木原敏江『大江山花伝』における女主人公の造型」では、「酒呑童子説話」の長い歴史のなかで、昭和三十年代以降の映画とまんがを、初めて女性が主人公として主体的に

活躍するようになった作品として位置づけた。川口の小説『大江山酒天童子記』の「すみ子」は、田中徳三の映画『大江山酒天童子』では姿を消し、その代わり、「こつま（中村玉緒）」と「渚（山本富士子）」というふたりの女性が登場する。このふたりの女性から大きな影響を受け、木原敏江の『大江山花伝』の女主人公「藤の葉（ふじこ）」が造型されたことを論証し、「酒呑童子説話」における女性主人公の質の変容と女主人公の自律性・主体性を論じた。

歌舞伎・映画・まんがの各場面を対照させ、視覚的な要素を言語に置換して読み解き、綿密な場面の状況やシナリオと対照することで、完成度の高い分析を行った。木原敏江『大江山花伝』が女主人公を主体的・自律的な存在として造型したことを指摘した点は、メディア・ミックスにより、時代性の変容の読み解きが可能であることを明確にしたものとして大変興味深い。

「終章」では、本論文の考証で得られた成果として、文学・翻訳・演劇・映画・まんがといった多様なジャンルにおける「酒呑童子説話」のメタモルフォーゼ（変容）の様相を整理して示した。

本論文は、古典的な「酒呑童子説話」が、近現代のメディアのなかで新たな息吹を吹き込まれ、再生してきたことを手堅く論じたものである。特に、歌舞伎・映画・少女まんがの視覚的なシーンを言語によって読み解くというメディアの《出典論》を試みた点は、新たな《メディア出典論》の方法論の提起として興味深い。従来、映画やまんがにおけるクロス・メディアは、社会学のカルチュラル・スタディーズの分野において研究されてきた。しかし、社会学では、仮説や推論の領域にとどまる事例も少なくない。文献学における《出典論》、メディアを対象とする《メディア出典論》という研究方法で、緻密な検証を重ねた実証的研究として、また、日本とヨーロッパ・アメリカの問題意識をつなぐ国際的視野をもつ研究として高く評価される。

総じて、「ちりめん本」と歌舞伎から時代劇への移行期に着目し、厖大なメディアと「ちりめん本」伝本を調査収集し、一字一句にいたる手堅い出典考証によって、客観的な出典関係・書承関係を解明し得た点は高く評価される。非漢字圏であるイタリアから大東文化大学推薦国費留学生として来日し、わずか五年の留学期間に、日本の考証学の方法を習得し、独自の見解を提示しえた努力は認められて良い。「ちりめん本」の基礎的研究と位置づけられるが、発展性のある有意義な研究テーマであり、今後、実証性に磨きをかけて、「ちりめん本」の出典研究を発展させていくことが大いに期待される。

課題として残った点は、両者の相違点を示しながらその意味の追求が十分ではなかった点である。

３．結論

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（日本言語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。

以　上